

仕  
事

(みにくいカエルの子はカエル)

意味のない馬鹿げた言葉が頭の中にこびりついたように離れない。いつものことだがどうにかならないものかと考えてしまう。理由がわかつているのだ。このようなことを考えてしまうというのは、私が極度に興奮しているか緊張しかかかっているときで頭の中のどこかの部分がそれに歯止めをかけようとして反対方向に作用して、感情を抑制しようとしているのだ。大学の時の同級生で、流行歌であるうが童謡であろうかどんな歌でもその場で即興で春歌やもつと下劣な内容の替え歌にしてしまうという特技というか変な癖の持ち主がいたが、彼本人は秀才で温厚な常識の人だった。あまりにきちんとした自分の性格が窮屈で時々そのようなとんでもない脱線をしてバランスをとっていたのだろうが、私のこの性癖も似たようなものなのだろう。

(激昂仮面のおじさんは)

わかつている。自分が怒っていることにはわかつていた。先ほど駅で別れた新入社員の振るまいが原因なのだ。その社員というのは入社して一年近くになるうかというのにまだに仕事を覚えようとしな。研修期間の後、私の外回りの営業の仕事にはじめはただ同行させて自ら見本を示すことで教育しようと考えていたのだが、いざその男に自分でやらせてみると私のしていることから何一つ学

んでいないことがわかった。自分の会社のこと当然知っていない。覚えている資料を調べよう。覚えていないこと、ひどいことには自分の持つておいたことを何ともせず交渉相手の目の前で勝手にたずねるのだ。はじめのうちには新人だから物覚えが悪いのも仕方ないかと思つて、質問に答えるのではなくて話を引き継ぐという振りをしてフオーロしていった。男が実は仕事を覚えるのだが、何度も同じことがあるうちにその男が実は仕事を覚える気というのがまったく同じことがあるうちにその男が実は仕事を覚えるのだから私が質問に答えるのは当然だといつてもいい。上司である私に對して自分が何をしているのか、全く自覚できない。いや、どうやれば十六年間も学校で時間を費やしてここまで常識の欠けた人間というものを作ることができるとか。親の顔が見た。という言葉が本当に当てはまることがあるのだと初めてわかった。そしてとうとうとどめは先ほどの交渉相手との商談の最中にその携帯電話にかかつてきた私用の電話だ。

「もしもし。あ、ママ？うん。僕。今仕事してるところ。うん。夕飯は何？うん。それでもいいよ。うん。まっすぐ帰るから。いつも。の時間。うん。じゃあね」

私は注意するよりもとにかくあきれた。うん。まっすぐ帰るから。いつも。交渉相手も一体こいつは何なんだという目で携帯電話に向か

って楽しそうに話をしている若造の顔を呆気にとられてながめてい  
るだけだった。それ以上会社の恥をさらすわけにはいかないので、  
次回あらためてということになってしまつてあわてて退散した。

「君、外回りは今日までいいよ。明日からデスクワークに回るよ  
うに上には話しておくから」

駅に向かうタクシーの中でその社員に告げた。私はすでにそいつ  
を見捨てる決心をしていた。

「ありがとうございます」

「なにがありがとうございます。お前はたつた今営業の仕事は失  
格だと言ひ渡されたのだ。そのことがわからないのか。部長や課長  
には教育係としての責任を果たせないことで申し訳ないと思つた  
が、このような男を営業においておくことは会社の信用問題に関わ  
ることなのだ。それに仕事用の鞆に漫画の雑誌を入れているような  
男では最初から営業という名の喧嘩勝負に勝てるはずがない。」

私はあまりに馬鹿馬鹿しくなつて会社に戻る気もしないので、自  
分はこのまま自宅に直帰するから会社に帰つて明日の午前中までに  
今日の報告書をまとめおくようにと、その若造に告げた。別れ際  
にそいつが言つた言葉も気に入らない。

「お疲れ様でした」  
何を言っている。誰のせいで私が疲れたのかということがかつ

て言っているのか。  
電話を入れたら「お互いたいへんですね」と反対に同情されてしま  
った。  
自宅の最寄りの駅で降りて、駅前の食堂で焼き魚定食を頼んでか  
ら、腹を立てたままでいると食事もうまくないと思っでなんとか頭  
を切り替えようとしました。妻は二番目の子供の出産の準備で実家に帰  
っている。数日は私が料理を作った娘の小学五年生のさつきと一緒に  
に食事をしていたのだが、さつきが言うには、私の作った料理を食  
べるくらいなら自分で作って食べたほうがまし、なのだそう。私  
も実は帰宅時間が不規則なのでそのほうが都合がいいといえれば確  
にそうなのだが、しかしこれでまたひとつ父親というものの威厳が  
失われたなと思った。このごろはこの駅前の定食屋で夕食をとるの  
が習慣になつてしまつていいる。  
漬け物に箸をつけようとしたとき上着の右側の内ポケットに入れ  
てあつた携帯電話が着信の合図をした。  
「はいもしもし」  
「私が一人でテーブルについていたまま空中に向けて話し始めるのを見  
て、周囲の人が一瞬視線を浴びせたのが感じられた。  
「倉田君だね」

聞き覚えのある社長の声でした。本業の方の会社の社長ではない。  
内職の方の社長だ。  
「一時間後にこちらから連絡を差し上げます」  
「それでは自宅に電話してください」  
「わかりました。失礼します」  
私は気まずい思いをしながら、定食の残りを急いで食べた。

「ただいま」  
「お帰りなさい。お風呂わいているよ」  
娘のさつきが居間のテレビでため込んだバレーボールの試合のビデオを食い入るように観ながら返事をした。家の隣にある企業の女子バレーボール部の練習所兼合宿所があった。幼い頃からその練習を見ていたせいから、さつきは大きくなった。小さい頃からボールを使い遊びは上手で、身長も母親に似て高い方なので、いろいろな試合に本気のようにだ。小学校の高学年になってクラブ活動というものが日課になると、さつきはバレーボール部にすぐに入部した。将来がどうなるのか、今から気になつてしかたがない。  
「風呂浴びてからさつきに、会社の仕事が残っていて部屋で整理をしな

「ければいけないからしばらくの間じゃましないでくれと断った。

「はい」

「そもそもさつきは父親の仕事に関心がない。娘に断らなければいけないというのもおかしな話だが、あぶない仕事の話なのでこの点だけは気を使わなければならない。

「かろうじて確保してある私の小さな書斎に入ってから、携帯電話である直通ナンバーを押した。

「もしもし」

「番号違いですよ」

「これが社長との合い言葉なのだ。

「倉田です」

「倉田君、またひとつ仕事を頼みたいのだがね。明日、家の方に来てくれないか」

「明日は定時で帰れますので、そうですね、七時にうかがえると思います」

「わかった。資料を用意して待っている」

「はい。では明日」

「よろしくな」

「私の本名は倉田ではなくて鬼頭という。倉田というのは内職の時に使う名前で、本職の会社の方ではもちろんのこと家族も倉田など

という名前を知らない。反対に内職の方の関係者で私の本名を知つているのはこの社長と限られた人だけだ。だから娘に父親が倉田だと名乗っているようなところを見られるわけにはいかない。なぜ倉田という名前を名乗っているかというのと、昔よく観ていた映画の俳優の高倉健と鶴田浩二のおふたりの名前から一字ずついたただけなのだ。

さらにいえば鬼頭という名前は妻の実家の姓であつて、私の旧姓は氷室という。妻に結婚を申し込んだ時に示された条件というのが、煙草をやめることと鬼頭の姓を名乗ってほしいということだつた。惚れた弱みというもので私はその条件をのんだ。ただしこちらも条件を出した。モデルガンの蒐集という大人げない趣味を見逃してくれということだ。妻は承知したがただし子供が生まれるまでだけだと念を押されてしまった。

妻の実家はその地方の名家で妻はその一人娘だ。結婚をすること鬼頭の姓が絶えることは両親が望まなかつたらしく、養子縁組はしていかないものからはその姓を継いだことになる。そのうちそのよくな話が妻の口から出るのではなにかと最近はびくびくしている。いまだに、鬼頭さんと呼びかけられても少し気がつかないことがある。そのれにもうサインをしようとする時に「鬼」という字を書くべ

きところをどうしてもつい「亀」と書きそうになつてしまふのだ（全  
国の鬼頭さんごめんなさい）。

その翌日、例の若い社員の出した報告書と称するものを見て、  
やっぱりこいつ何もわかつていないと思つた。自分がした仕事は何  
だつたのかを全く把握していない。あまりにも見事なまでに的を完  
全にはずしている。完璧すぎてわざとやっているのではないかと疑  
いたくなる。電車の窓から見た踏切にとまっていた赤いスポーツカ  
ーの名前を調べなければいけないなどと言ふことが会社の仕事と何  
の關係があるのだ。もしもわざとやっているのならそういう才能は  
もつと他の場所で生かしてもらいたい。こんなものは報告書ではな  
くて小学生の作文以下だ。

私はその報告書を日付と場所と商談相手の名前以外はほとんど全  
部加筆訂正してから、課長に手渡すときにその社員のことと相談を  
持ちかけた。彼女（課長は女性である）はうす気がついていた  
ようだ。私がある社員に行いについて説明すると、やはりそうだつ  
たかというように同意した。社会人予備校というものがあつたら  
そこに入れて一からしつけをし直さなければどうにもならないくら  
いひどい、とにかく営業であんな人間を使うわけにはいかないし責  
任がとれないと、頭を下げて頼むと課長は納得してくれてなんとか

内勤で使ってみると返事をしてくれ。これでまたひとつ課長に借りができてしまった。我が社は構造不況業種といわれながら業界では一流のオペル産業なのだ。採用する人間に困るような会社ではないのだが、何かこの人間には縁故とか取引材料がからんでいるのかと人事担当にそれとなく尋ねたことがある。特に何もなくて採用条件に合った人間の上の方から選んでこうなるといなのだ。一体この世の中どうなっていくのだ。

定時で退社して食事をしてから社長（裏の方の会社の社長で以下同様）の自宅に向かった。倉田だと言乗るとモニターテレビで顔を確認したらしく大きな門の脇にある扉が開いた。若い人が黙って頭を下げてから居間に案内してくれ。社長はいつもこのように地味だが高級な和服を着てソファでくつろいでいた。あいさつもそこそこいいものだ。葉巻を勧められた。ここに來る楽しみのひとつがある。その資料を見てくれ。プロフィールとこの二ヶ月間の行動記録がある。私は分厚い封筒を渡された。中から書類と何枚かの写真がでてきた。

「中堅の金融会社の管理職。堅気ですか」



私は行動記録を見ながらどのようなやり方があるかを考えた。単身赴任でマンションの一人住まい。金曜日はいつも酒を飲んで帰るというというパターンが見えてきた。

「今度の金曜日の午後十時、自宅で行います。いつもの運送会社の人を二人お願いします」

「わかった。他には何かがある」

私は段取りを説明して、必要なものの手配を頼んだ。

「じゃあよろしく頼む。報告は遅くなっても電話でしてくれ。手間は賃はいつもの証券でいいか」

「はい。わかりました」

私は社長の家を辞して、自分の家に帰った。娘は自分の部屋で学校の宿題をしていた。

三日後の金曜日の午後九時過ぎ、私は標的の住むマンションの近くに停まっている運送会社の自動車に近づいて窓ガラスを叩いて中の人の注意をうながしてから、右手の指を顔の前である形に交差させて合図をした。それがあらかじめ決められた暗号だ。助手席の顔だけは知っている。男性が同じ合図をした。私は標的の住むマンションの方を指さして、無言で確かめた。彼も同じ方向を指さして標的がすでに帰宅しているということを無言で示した。

私は運転席の男性がカモフラージュの

小包を手を持ち、助手席の男性が荷台から少し大きめの長期旅行用のトランクを取り出すのを待って、彼らのあとから少し距離を置いてマンションに向かって歩いていった。そのマンションにはオートロックもモニターカメラもないので比較的楽に侵入できたがそんなものがあってもいくらかでも方法はあるのだ。私は制服姿の彼らがエレベーターで目的の階に上がるのを確かめてから、自分はこに乗った。

標的の部屋の前、小包を持った制服姿の彼がドアのチャイムのボタンを押した。もう一人と私はドアスクープの死角にひそんでいる。「なに？」

「夜分恐れ入ります。夕焼け運送ともうしますが昼間伺ったところご不在の様子だったので、あらためてお届け物をお持ちしました」

「誰から？」

彼はあらかじめ調べておいた、標的の家族の住所と名前を口にしていた。やや間があつてドアチェーンを外す様子がしてドアがやや開き、小包を持った配達人だということを確認してからドアを大きく開いた。その瞬間に私と制服姿の二人は無言で一気にその部屋に押し入った。これからあとの作業の様子を詳しく書くと、まねをして本当にやっ

てしまう人が最近はいるので詳細は書くわけにはいかない。要点は偽装をして彼がいかに酔いざましの深夜の散歩に出かけて事故にあつて二日後東京湾にのんびりと息もせず浮かんでいるように細工をしたということだ。

彼の体をまだ水温の低い運河にそっと遺棄してゆつくりと流れていくのを確認してから、私はどんなに遅くなってもかまわないから連絡を入れてくれといつも言われていたとおりの社長宅に電話をかけた。

「もしもし、夜分恐れ入ります」

「番号違いですよ」

「魚の餌です」

「ああ、ご苦労さん」

これで今回の仕事は一段落だ。私は二人の助手の労をねぎらう意味で軽く挨拶をしてからタクシーを拾ってまっすぐ帰宅した。彼らの名前も素性も私は知らない。

さつきは今日はお父さんは遅くなるから先に寝ていなさいと言つておいたとおりの、戸締まりを厳重にして居間の灯りをつけたまま寝床についでいた。

私がこんな仕事をしているのにはそれなりに訳がある。始末稼業

が好きなわけではけつしてない。  
当高生も頃私はずいぶんと荒れてすきんだ生活をしていた。それが  
あるとき半ば強引に本職の人間に事務所まで来いと呼び出されたの  
だ。彼らの生活の範囲を侵略するようなことをしたのだというのな  
らどうにでもしろというつもりで呼び出しに応じた。ところが行っ  
てみると礼儀正しく迎えられて、今の社長その当時の組長にこん  
んと親身に説教されたのだ。若い内の勢いだけで突っ走っている  
いつか取り返しのつかないことになる。世の中そんなに悪いことば  
かりじゃやない。今のうちならいくらでも取り戻せることだから早  
心を入れ替える。社長はまるで我が子に説教をするように説得して  
くれたのだ。私にはかろうじてそのような人の心がわかる感受性が  
残っていた。私はきつぱりとけじめをつけて普通の高校生になった。  
なぜ社長がなわばりの中でふてくされていたかの不良学生を更正  
させようという気になったのかいまだに教えてくれない。  
とき、今の自分の生活があるのはひとえにあの社長の言葉があった  
からではないのかと考えた。彼がいなかったら私はとつくの昔に堀  
りの中かそれともあの世に行っていたに違いない。そう思っていた人が  
りかで社長の事務所を訪れた。まだ私の顔を覚えてくれていた人が

いたので社長に会わせてくれた。私は今の自分があるのはあのとき  
の社長の言葉のおかげなのだから何とかして恩返しをしなければな  
らないと申し出た。社長は恩返しというのなら私がまっとうな道を  
はずさないで生きていくことが恩返しだと返事をしたのだが、私はそれ  
では気が済まなくてもつと具体的な形で恩を返したいのだと力説し  
た。

「そんなに言うんだったら、この人について行って見ろ。井上、例  
の件、この若い人の前で見せてやつてくれ」

私は自動車の運転を命ぜられてその井上という名前の中年のさえ  
ない印象の男性に言われるがままに、繁華街のはずれにやってきて  
車を止めた。すでに夜遅くだった。

「これから起こることを見ておけ」

「そう言っただけで彼は車から降りて人混みの多い方に歩いていった。一  
人の恰幅のいい男性とすれ違った一瞬、何か光った。井上はその  
まま歩いていった。ぼつたりと倒れて動かなくなつた。私は全身がしびれ  
苦しみだした。ぼつたりと倒れて動かなくなつた。私は全身がしびれ  
るのを感じた。何が起こつたのかわからないが今自分の目の前で人  
が殺されたのだというだけわかつた。失禁してしまつた。

「何があつたんだか井上が助手席に戻つていた。」

私がかろうじて声を出すと、井上は外からは見えない位置で、細く鋭い長い錐のようなものを一瞬見せた。それから事務所に戻るように命じた。

「どうだ。俺たちがやっているようなことはあんなことだ。何か俺たちの仕事に役にたとうなんて考えられるか」

社長が、これで懲りたかという口調で私に言った。しかし私は自分でも思いがけなく

「やりません。やらせてください」

と返事をしてしまっていた。これは社長も含め室内に居合わせたみんながあきれたという表情をした。私にはどうやら破滅願望のようなものがあるらしい。

「そこまで言うか。それじゃ最初は井上について仕事を覚えることだな」

こうして私は、極めて平凡な生活を送ることの代償としてその対極にあるもっとも非道な行為を自らに課したのだ。それが私なりに考えた恩返しやり方だった。

会社勤めをしながら時折井上の仕事を手伝うという形でしばらく見習いの仕事が続いた。やがて井上がもう一人でできると社長に伝えた。社長はもうこれでいいんじゃないのか気が済んだんじゃない

のかと尋ねたが、私はなおもこだわった。社長はそれならば非常勤ということで再契約するといい。私は無償でいいのだから、言ったが、社長は一定の仕事をした人間にしかるべきものを支払わないと他の者に示しつかないと言って、その折り合いで報酬の決め事が結ばれた。

は、それ以来、いろいろなことをやった。いちばん不思議だったことは、人間の痛覚と運動神経を麻痺させてそれでいて意識だけははっきりさせておくことができるかと聞かれたことだ。そのやり方は習って、い、て、で、き、る、こ、と、は、で、き、る、か、と、三、時、間、が、限、度、だ、と、返、事、を、し、た。呼び出された倉庫には骨組みだけのベッドに男が縛り付けられていた。私は教わっていたように処置をしてしばらくたってから確認のため、男の足の裏をカッターナイフで浅く切ってみた。効果はあるようだ。ついでといってはおかしいが目を閉じられないようにできるかといわれたので、私はその場にあつた瞬間接着剤で瞼をあけたまま貼りつけた。そこで私の役目は終わったので早退させてもらったのだが、何工道具や調理器具あるいはガスコンロなどが並んでいたのだが、何があつたのかはいまだにわからない。

私は裏の仕事が終わると、自分のベッドではなくて書斎の安楽椅子にすわってうとうとするのが習慣になつてゐる。この方が仕事の

あとでは楽なようなのだ。この書齋は妻に頼み込んで、この中古の住宅を改装するときには何とか割り込ませてもらったものだ。大きさは二畳足らずだが居心地はいい。妻は大学の建築学科というところを出ていて設計事務所といる。仕事柄こういふものには知識もあり目も利くのだが、最初の家を購入するといわれたときは悪い冗談だと思つたものだ。当然建て替えるのかと思つていたら、ちゃんと言つておかげで使ひ勝手証を、その家を建てた大工の棟梁から得ていた。おかげで使ひ勝手のいいこざっぱりとした一戸建ての住宅が格安で手にはいつたのだ。が、妻にいつそう頭が上がりなかつた。妻の実家からも金を借りていて名義は妻と私の共有といふことになつてゐる。もしもその借金のことと妻が何かを言ひ出すようなことがあつたら、裏の仕事で得た報酬を現金化してでも全部精算して離婚してやる。

翌日の土曜日に、学校が春休みになつてさつきが妻の実家に行くのを駅まで見送つた。さつきは学校が休みになるとおじいちゃんとおばあちゃんの家に行くのをいつても楽しみにしている。私はこれから二週間ほど二人時間。向こうには迎えが待っている。私はこれから二週間ほど一人暮らしということになる。

あけて日曜日、私は食料品を買いだめして冷蔵庫に閉まつてから、

久しぶりに林家正蔵改め林家彦六の『鯁沢』のテープを探し出して居間のステレオで聴いていた。その話は元々『三題噺』といって演芸場の客から脈絡のない『題』をいくつかもらってそれを元に即興で語られたものが、古典落語の傑作になっているということだった。名人上手といわれた人たちが相次いでなくなってきた。落語はもはやごく一部の流派をのぞいては現代性のまったくない博物館行きの文化財になってしまっていて、私は最近の落語というものをほとんど聴かない。こうやって古いテープを時々取り出しては、同じ話を何度でも聴いて楽しんでる。即興で語られた噺が時代を超えて普遍性を持つというのは、最初にその噺を語った落語家が天才だったのか何かの偶然の巡り合わせがあったのか、それとも語り継がれていくうちに洗練されてそれが最後に昭和の名人たちの手で磨かれたというところなのか、どれなのかはよくわからない。文化的背景も時代的背景もわからない、何十年も前に録音された人の話がおもしろくて、今話されている落語が少しもおもしろく感じられないというのには私という人間が今の時代とずれている証拠なのかもしれない。

探しているテープが終わってしまった、他の人の『鯁沢』がないかなとかで見たように、玄関のチャイムが鳴った。ドアを開けてみるとどこ

た。  
「お休みのところおじやまします。私たち、となりのバレエボール部のものです」  
二人がそろって頭を下げた。どうりでどこかで会ったような気がしたはずだ。私はこの二人をさつきが観ていたバレエボールの試合のビデオの中で見ていたのだ。  
「これはどうも。娘がいつも練習を拝見させていただいているようでありがとうございます」  
私はこの近所では『背が高くバレーボールの上手なさつきちゃん』の父親』としてしか認知されていない。  
「今日は何か特別なご用事ですか。妻も娘も今実家に帰っております。私一人なんですが」  
明らかに二人がややがっかりしたという表情をしたのを見逃さなかつた。  
「いつも朝から晩まで練習ばかりでうるさくてご迷惑かと思いましたが、一度ちゃんにごあいさつに伺わなければいけないとみんなで相談して見たんです」  
よく見ると背のやや低い（といっても立って並んだら私の頭頂部の毛髪が薄いのが見えてしまう）方の女性が何か手みやげのような包みを持っていた。

「これはかえって恐縮ですね。私も妻もいつかそうに気にしていません。娘はみなさんの練習しているところを見て、それを感じさせて育ったようなものです。せっかくお越しただいたのですから、よろしかったらお上がりください。コーヒーぐらいしかないんですが」

「おじやまじやないでしようか」

「そんなことはありません。娘がいたらきつとよろこんだでしょうね。一日違いだ」

居間でコーヒーを二人にすすめながら、練習場のさっきの様子などについて聞いてみた。さつきがいと、小さい子の前でもいい加減なことはできないと、かえって練習が引き締まっていいのだと、答えにくれた。話題は自然とバレーボールの話になって、バレーボールの世界というのとはどんなものなのを教えるもらう結果になった。

それによると驚いたことにバレーボールの選手になるきっかけというのには早い場合にはすでに小学生の頃から見込みのある子供はリストに名前が載せられ、たとえ学区の外であってもバレーボールの強い中学校に集められるのだそうだ。そして中学校の時点でオリンピック有望選手という見込みのある子供がピクアップされ、高校に進学するときには他の県のバレーボールの強い高校にまで越境して入学して、体育館と寮の間を往復する以外にはほとんど何もでき

ないような生活になると、多い。社会人になって、バレーボールを続けることになっても、多くの人は、社会人になつて、社員といふ肩書きで練習と試合以外にほとんど、私生活といふものから、青田買いがあるとは。野球の世界でも、そのように、子供の世界でも、事情はまったく言つては聞いてはいたが、バレエ、ボール、多感な青春時代に生活のすべてが、いいほど同じなのだ。いちばん、青春時代に、レールと同じなのだ。人間として、バランスのとれた大人に成長できるのかどうか心配になつてきた。しかし、考えれば、今の子どもたちの経験する生活といふのは、私には、解不能な時代の分らないものになつて、私のように、打ち込めることもない。青春時代を経験するよりは、ひとつのことに、純粹に打ち込めることの方が、かえつて、幸せな場合もあるのか、もしれない。この国のスポーツの世界といふものは、うしろ向きで、信じて、切れないのだ。私が、そのスポーツの世界といふものは、理由というものは、中学校の時の、体育の教師が、教育といふ手合ひの、人間の命令に、忠実に従うように、生徒を訓練すること、だといふ手合ひの、人間で、何か氣に入らないと、平然と私を含めた生徒を殴りつけ、とうとう、頭に来て、その教師に、思い切り殴り返して、停学処分を受けたという、頭が、かこの国では、好きで、始めたはずの、スポーツが、いつの間にか、命令

を受けてするだけの過酷な苦役になってしまふような嫌な印象がある。さつきの将来の選択にはほとんど時間が残されていないのかも。しれないことに気がついて、急に不安になった。このお二人が今どんな気持ちでバレエボールをして、いつきに直接話していただければいいのだがとふと考えた。

私はあまり足止めしても申し訳ないから、最後に近所の甘えというところで、さつきの誕生日にとあらかじめ買っておいたバレエボールにお二人のサインをいたたくことにした。そのバレエボールは今でもさつきの宝物になっている。さつきがある程度判断力が付いてその上でバレエボールの道に進みたいと言ったとき、さつきが「さつきは物事ではなかつたといつてくれたらと思ふだけだ。ふたりは妻とさつきによろしくと言つて帰つていった。」

内職の方の仕事をしてから一週間も立たないうちに、家にいるとき社長から電話があつた。

「何かまずいことがありますか」

「いや。そうではないんだ。別件で頼みたいことがあるんだ。明日いいだろうか」  
「では、明日の七時にご自宅に伺います」

私の内職仕事は一年に一回、多くても二回までのペースだったのだが、今回の話はずいぶん急だ。何か異例の事態があったのかと考

えた。翌日の午後七時に社長の自宅におもむくと、いつもと違って和室に案内された。

「今回はどのようなお話なんでしょうか」

「ちょっと込み入ってな。実は他の会社との営業の範囲の談合がうまくいかなくて、関係がこじれてしまったんだ。会社と会社の話なので非常勤の人間を巻き込むことではないと考えて黙っていたんだが」

最近と同じ職業の他社とはできる限りトラブルを起こさず話し合いか入札で決めるのだと聞いていた。

「きっかけはささいなことだったんだが、それがエスカレートしてしまつて今は面子の問題になつてしまった。互いに引くに引けない

というやつだ」  
「すると戦争ですか。それだと私は兵隊の勘定外になると思います

が」  
社長は顔の前で右手を振つてそれを否定した。

「今時そんな出入りなどということはしない。共存共栄でいかないと共倒れになるからな。ただどうしても黒白をはつきりつけようじ

やないかというんで、ここはお互いのいちばん強い持ち駒で勝負させて決着をつけようということになった」

「私の仕事は始末屋ですよ。一通りのことは教わっていますが、喧嘩事というのは経験がありません」

「それを承知の上で話している」

「相手の持ち駒は誰なんですか」

「横田だよ」

横田というのはフリーランスの拳銃使いで無敗の戦歴を誇る伝説の人物だ。一時はこの社長と契約を結んでいたこともあって私は横田の顔を知っていた。彼は常に条件のいい方と契約をして今まで一度も仕事をしくじったことがないと聞いていた。

「相手が横田を持つてくるのならこちらもガンマンを出すべきじゃないでしょうか。なぜ私なんですか」

「そう来ると思った。拳銃の腕だけなら確かに会社の人間で国体級の一流なのは何人かいる。しかし彼らは的を撃つのはいくら正確でも、なまじ横田の腕を知っているだけに名前を聞いただけでみんな腰が引けてしまつて始める前から逃げているんだ。話にならないよ」

「お言葉ですがそうだとしたらこの勝負誰を持ってきても向こうの勝ちになりませんか。横田を出したところで勝負はもうついていると思うんですが。拳銃については素人同然の私を持つてくることは、

「あちらの会社に対して失礼なことになりませんか」

「それはもう考えた。しかし会社の間の礼儀としては勝負が見えて  
いることでもやることだけはきちんとするのが約束になっている。  
ちよつとお前を試しているか」

「何でしょうか」

「見ていなさい」

社長は床の間に置いてある白木のさやの日本刀を手にとって椿の  
生け花の前に正座した。

少しの間があつて、社長は左腰に構えた刀を一瞬の内に抜きはな  
つて横様にはらつてから即座に刀をさやに収めた。少しも動かない  
生け花の椿の花のひとつがぼとりと落ちた。他には何一つ触れて  
いないようだった。社長がしばらくして私に向き直つてから言った。

「どうだ。お前はこの椿の花になれるか」

「わかりません」

社長は一瞬間をおいてから言った。

「真剣でいいか。それとも木刀にするか」

「同じことです。佐々木小次郎は木刀で殴り殺されたのじゃありま

せんか」

「うん。では真剣にしよう」

社長は私に向き合つて正座してしばらくの間目を閉じて黙つてい



いのか。この何々が不自由という言い回しもそこに差別意識がある限りまたいつかは糾弾されることになってそのうち言葉が窒息するのだろうな。金銭に不自由なひとなどといわれたくないし。

気がつくくと社長が上段から振り下ろした刀の刃先が、私の頭髮に触れる寸前で止まっていた。しばらく間があつて、社長は刀をさやに収めて床の間に戻した。

「見た目に間違いはなかった。お前はすでに捨て身という極意を身につけていている」

勘違いされてしまった。私は虚心になつたのではなく、上の空とどうかあるいは意識を持つたまま気絶してただけなのだ。

「この勝負、お前の腕ではなく気合いに全部託すことにする。お前ほどの人間ならば相手も文句を言わないだろう。そのかわりといつては何だが今回で仕事は最後にしよう。十分に働いてもらったからな。退職金ということで勝つても負けてもボーナスを出すよ」

「はあ。わかりました。ひとつお願いしたいことがあります。よろしいでしょうか」

「言つてごらん」

「生命保険に入つたばかりなのですが、私とその勝負で負けたらきつと保険会社は、決闘というの自殺と同じことだから保険金は払えないとごねると思ふんですよ。その時には交通事故で死んだよう

に偽装して、家族に金が残るように細工していただけではないでしょうか」  
「わかった。骨は拾ってやるから心配するな。具体的なことは横田と直接やり合っただけで済ませてくれ」  
「はい。よろしくお願ひします」  
何かおかしいのだがなあと考えながら社長の家を辞した。

日曜日、家の居間で古今亭志ん生の『黄金餅』を聴いていた。ちょうど棺桶をかついだ行列が江戸の下町から江戸の中心を横に見て南のはずれにある菩提寺まで歩いていく道中のくだりにさしかかっていた。いちばん好きなのところだ。一見淡々とした描写の中に見たこともないはずの江戸の町並みがかつきりと浮かび上がってくる。これは知らず知らずのうちに引き込まれて行くが実はとんでもない大業なのだ。志ん生という人はおそらく基礎がしっかりできていてちゃんと思えばいくらでもそうできる人だったのだろう。しかしそのような超絶的技巧の持ち主が大業を披露した直後に脱線転覆して支離滅裂に破綻するのだ。そのことにこそ凄みがあるのだ。いつも思う。しかし行列が新橋にさしかかるときに携帯電話が着信の合図をした。また最初から聴き直さなければいけない。

「倉田だろ。横田だよ」

「ご無沙汰しています」

「あいさつはどうでもいいんだ。そっちのほうの上の人からもう話は聞いているな」

「はい」

「どういうわけかお前とやり合うことになってな。ふしぎなもんだ」  
「私を指名するというのがまだよくわからないですけれど。横田さんはプロだけれど私はアルバイトなんですよね」

「俺もそう思うよ。それに俺は拳銃稼業がお前は始末屋だ。お前がちやかを使うなんて聞いたことがない。勝負が成立しなと思うんだが、決まったものはどうにもならない。やってみるしかないと」  
「差しでやるという条件でしたね。道具と場所と時間を決めないと  
いけませんね」

「そうだな」

「どれをとりますか」

「俺が決めていいのか」

「はい。この道の先輩ですから」

「こんな商売に先輩も後輩もあるか。道具を選ばせてもらおう。おれはちやかしか使えないからな。いつもの二十二口径だ。お前はもつと弾のでかいのでもいいぞ。急所をはずしてもはつきり決着がつく

「からな」  
条件の話し合いになれば横田は当然道具として拳銃を選ぶに決ま  
っている。だから私は何も譲歩したことはない。  
「私もそれにします」  
「いいのかよ。二十二口径は急所に当たらない限り大した効き目は  
ないんだぞ」  
横田の口調から自信が感じられたが、私はそのことについてはあ  
らかじめ覚悟していた。  
「大きいのは使えないんですよ。最初の一発だけで目がくらんであ  
とは的にかすりもしないんです」  
「じゃあ道具は決まりだな」  
「ひとつお願いがあるんですが」  
「言ってみな」  
「弾は双方六発にしてもらえませんか」  
「俺はそんなにたくさんいらないうんだが、お前がそれだけほしいっ  
ていうんならそうしよう」  
「それともうひとつあります」  
「まだあるのか」  
「抜き撃ち勝負ならやるまえから横田さんが勝つに決まっている。  
私は最初から持っていていいですか」

「ああいいいよ。俺にしたらどっちでも同じことだ。それくらいハ  
ンディはあっていい」

「じゃあ場所と時間ですね」

私は盛り場の大通りからひとつはいつた裏通りを提案した。

「変な場所を選ぶもんだな。じゃあ勝負は夜中か明け方か」

「いいえ。翌日の仕事に差し支えますので午後九時から九時半まで  
の間でどうでしょう」

「お前。何を訳の分からないことを考えている。それにいくら裏通  
りでもあそこらは人通りが多いぞ。すぐにポリ公が来るに決まっ  
ているし、第一関係のない人を巻き添えにしかねない。無茶なことを  
言うな」

「観察したことがあるんですよ。平日のその時間頃になるとあの通  
りはちよつとの間人通りが切れるんです。それにあそこは両方の会  
社の境界線になっていて、店関係の人は見て見ぬ振りをするって聞  
いています」

「でもおおっぴらに振り回せる道具じゃないぞ」

「最近の人っていうのは、自分に関係のないことなら何があっても  
興味がないんですよ。せいぜい映画かドラマのロケだとぐらいしか  
思わないでしょう」

「そんなものなのかね」

「念のために通りの両端で会社の人に見張ってもらっておくというのならどうですか。そこでピケやってもらって警察の目をごまかすんですよ」

「おもしろい話じゃないか」

「あとは、近所の迷惑にならないように消音器をつけるのと、そうですね、もしも手元が狂って関係のない人に怪我をさせたならその時点で怪我をさせたほうの負けというのはどうですか」

「わかった。ずいぶんとおかしなことを考えつくもんだ。お前つてやつは本当に奇妙なやつだな」

あとは双方の組織に今の筋書きで段取りや立会人を決めてもらうことにはした。本職である横田に拳銃で勝負を挑むのは無謀だということにはわかっていゝ。しかしむこうが横田を持つてくる以上は拳銃勝負しかないのだ。横田に他の勝負をやらせるといゝのは侮辱になる。腕相撲やオセロで勝負するなんて馬鹿げているし、オセロでは最近には娘に勝てない。だがまだ社長の考えがよく理解できない。どちらの会社も本来は博徒なのだからどうして丁半の賭けで勝負をしようとしなのか。しかし決まってしまうことに文句は付けられない。私が降りると言ったら社長と組織の面子がつぶれてそのあとつきの連続で出した条件については確認してみた。彼の腕が一流であ

るが故にそこに落とす穴があるのでではないか。達人と呼ばれる人間をこれだけ支離滅裂な条件の下にさらしたらどう反応するのか。そこに万にひとつの可能性があるのではないかと考えた。

翌日、会社の帰りに社長の事務所ビルの地下にある秘密の練習場に寄って、預けていた井上先輩から譲り受けた消音器付き自動拳銃を教官から受け取って、自分専用のゴーグルをつけてから試し撃ちをした。四ダース撃ったが私の腕前では二十五メートル先のピンポン玉に当たるくらい成績にしかならない。狙ってそうなのだから撃ち合いになつたらまぐれしか期待できないんじゃないかと思つた。逃げようかな。しかしそんなことをしたら家族に迷惑がかかる。やるしかないのだ。この拳銃は当日現場で受け取ることにした。消音器が大きくて持ち歩ける代物ではないのだ。見かけだけで言えば水道管に取っ手のついたようなぶかつこうなものなのだ。

私は家に帰ってからも、妻と娘が留守なのをいいことに長らくしまい込んでいたモデルガンを取り出して、さっきのビデオを拝借してバレーボールの試合でボールが選手の体に触れる瞬間を見極めて引き金を絞るというイメージトレーニングをしてみた。二試合分やってみたが効果があつたかどうかよくわからなかつた。

いよいよ約束の当日の午前中、今はとにかく仕事に専念しようと

しながら気が散って仕方がないところに電話がかかってきた。さつきからだった。

「おとうさん。男の子だよ」

「さつきがいつものようにきっぱりとした口調で言った。

「男か。これでさつきもお姉さんだね」

「うん」

「お母さんは元気かい」

「はい」

「それじゃあ、あさつて駅に迎えに行くからね」

「はい」

電話の様子を聞いていたまわりの人たちがからさりげなく、おめでとう、おめでとうございます、と声をかけてもらった。

男の子か。名前を考えなければいけないが、覚えやすくて親しみがあつて印象のいい名前というのはなかなかむずかしい。子供にすぐわかるように「一」と書いて「はじめ」と読ませようかと思つたが、これはすぐに「一」と書いて「キトウイチ」では将来何をいわれるかわからない。結局平凡に「学」と書いて「まなぶ」と読む名前にした。その名前を書いた紙を封筒にしまつて机の上に置いておいたが、ひよつとするとこの子には会うことはないのかも知れないという考えが一瞬だけ頭をよぎつた。

「鬼頭主任、今日の昼休み時間ありますか」課長が声をかけた。  
「はい」  
課長がそばに寄ってきて小さな声でいった。  
「部長も交えて相談があるんですよ」  
そのことで何が話題になるのかは大体見当がついた。  
昼休み、ざるそばを食べてから課長に目で合図して、二人で部長室にいった。  
彼女（部長は女性である）はいつもの習慣でブラインドを降ろして部屋の灯りを暗めにしていた。  
私の方からさっさと切り出すことにした。  
「例の内勤に回した社員の件ですね」  
私から言い出すことを待っていたように部長が答えた。  
「そうなのよ。今までこれはどうしようもないなと思う新人は何人もいたけれど、今度ばかりはちよつと話にならないのよ」  
どの程度ひどいのかを一応聞いておこうと思つて黙つていた。  
「この間も、一般職の女の子がこの部屋に駆け込んできたの。あいつつたらその子を手招きしてコピーの仕方を教えてあつても読もうとで言うんだって。すぐそばにマニュアルが置いてあつても読もうともしないの。教えてもありがたうの一言もないのよ。いくらあつちが総合職で自分は一般職だとはいつても会社では自分の方が先輩な

「のにつてその女の子私の前で泣き出しちやったの」  
「それはひどい」  
部長は一般職からのたたき上げで人一倍の苦勞人だからそういう  
氣持ちがよくわかるはずだ。  
「それと内勤で頼み込んで入れてもらった課長から直接言われちゃ  
ったんですけれどね、話にならないですって」課長が話を引き継  
いだ。「あいつったら仕事でわからないことがあると、誰でもかま  
わずやり方を教えるっていう発想が全然ないみたいなんですよ。しまいに  
自分で調べるっていう発想が全然ないみたいなんですよ。しまいに  
は仕事のじゃまをするなうるさいって怒鳴りつけても口をぽかんと  
あけているだけですぐ他の人と同じことをするんですって。学校出  
てるんなら自分にすぐ他の人に同じことをするのらくらいのこと  
は普通は考えるんじゃないかって言われちゃったのよ」  
「そこまで落ちた人間だとは思わなかった。戦争の真っ最中で頭の  
上を弾が飛び交っているのに銃の撃ち方を一から教えるなどという  
兵隊がどこにしているのだ。それに仕事のノウハウというのはい人一人  
が苦勞して努力して身につけたものなのだ。それをただで教えるな  
どというの追いはぎかつぱらいと違わないのだ。  
部長と課長の話のつなげ方からみて、これは私に言わせようとし  
ているのだというところがわかった。よろしい。それに乗ってやろう

ではないか。  
「つぶすしかないんじやないですか」  
課長と部長が一瞬間をおいた。課長が言った。  
「でもそれだと教育係の鬼頭主任の面子をつぶすことになりませんか」  
「あんなやつ一人のことですぶれるような面子じゃありません」  
部長がぼそりとつぶやいた。  
「試験雇用期間は過ぎちゃったしねえ。それにいわゆる素行不良には当てはまらないし」  
「しかしだめなものだめで、ただ首にするだけじゃ変に居直られますよ」  
「そうねえ、あんなやつ野放しにしたら世の中の迷惑なものね」  
「だから私は会社の中でつぶすしかないと思います」  
「それじゃあどんなやり方があるか」課長がたずねた。  
「それは部長と課長がご相談の上で決めていただけばその御指示に従って責任を持って段取りします。私が考えるようなしかとぐらいではあいつには効き目はありません。昔からいじめは女の子の方がうまいって相場が決まっていますから」  
部長と課長が顔を見合わせてからこちらを向いてそろってにたりと笑った。こわい。

「でも組合が何か言いませんか」

「あいつは組合には入っていません。組合って言うのはアカの手先でエリートのは自分には関係ないって思っているみたいですよ。うちの会社の組合はそんなことないんですけれどね。組合でもあいつのような存在は見放してます」

「そのあとどうなりますか」

「うちに帰ってママに泣いて訴えるんでしようね」

「ママ？」

「はい。それでママが会社に怒鳴り込んでくる」

「変な話ねえ」

「それで相手にされなかつたら、警察に行くんじゃないですか」

「人権擁護委員会じゃないんですか」と課長。

「それとも労働基準監督署」と部長。

「警察なんですよ。それで自分たちのやっていることがどんなに馬鹿げていることか気がついて、そのうちあきらめるんじゃないですか」

「でも最悪の場合は訴訟もありますか」課長がやや心配した。

「そもそも訴えるべき内容というものは存在しないと思うんですよ。それにそうなったとしても、これは人事部の話で私には発言権はないんです。訴訟の過程であいつがどれほど最低な人間かを世間の

さらし者にしてしまえばいいんじゃないでしょうか。それくらいの投資効果はあると思えますよ」

「よろしい。それではあとは課長と私に任せてください。今の線で具体的なことを考えます」

「はい。それでは失礼します」

「はい。それが過ぎたら、私は席に戻らなかつた。戻つても私をあえて無視していらした。その方が気が楽だ。

私は仕事をしている振りをして、頭の中で今夜の予行演習をしていた。あらかじめ調べておいた裏通りでどのよう横田と対するのかわか。状況設定を様々に変えながらイメージしてみるのが、どうやって私に負ける結果にならう。雨や風という条件が加わったまま絶対勝ち目はない。私が勝つとしたら、横田が立たないまま絶えているか私の存在に気がつかないで背中を向けたままにしている場合くらいだ。下手をするとそれでも負けるかもしれない。私は数十パターン考えたものをすべて折り畳んで意識の奥にしまい込んだ。何か役に立つものがあればその時に自動的にどれかが出てくるだろう。

こるものだと思つた。起こるときにはいつぺんにたくさんのが起こるものだと思つた。

会社を終えてから約束の時間までしばらくあるので、パチンコで時間をつぶした。目に負担をかけないように盤面は凝視しないで、左手を使った。何回か大きな波があったが、結局三万円すった。それから座りっぱなしだった腰を伸ばすためにあたりを散歩して頃合いをみて約束の場所に向かった。

通りを見下ろす二階にある喫茶店で人の流れを見ながら約束した時刻になるのを待っていた。コーヒーを頼んでいてすでにテーブルに置かれてあるのだが、腹を撃たれた場合食べ物や液体が内臓に残っているとしても苦しいと聞いていたので、コーヒーも水も手をつけないままでいた。夕食もまだ食べていない。

九時に近くなると人の流れが少しまばらになって飲食街が次のサイクルにはいる前の空白の時間帯になった。そろそろかなと思つたとき、携帯電話が着信の振動を起こした。

「はい」

「横田だよ。そろそろ始めるか」

「そうしましょう。どこにいますか」

「通りの向かい側の酒場だ。こちらからはそこがよく見える」

「では五分後でどうですか」

「わかったよ」

私が立ち上がるのを合図に関係者が配置につくことになってい

た。  
洗面所で用を足してから顔を冷たい水で洗った。備え付けのペーパータオルで手と顔をふいた。用意しておいた黒縁の眼鏡をかけた。私はひどい近眼と乱視で、日常生活ではあまり意識していないもの、どうしても遠くのものを見なければならぬようなときは、このような眼鏡をかけないと視野がだぶってしまうのだ。コンタクトレンズにしないのは自分の性格がかなりずぼらであることを考えての上だ。

コーヒーの代金をはらって通りに面している階段を下りていく途中、同じ撃たれるのならうまい夕食を食べてうまいコーヒーを飲んでおけばよかつたかなと、ちらっと考えた。ではあとでうまい夕食を食べるためにも全力を出そうと、考えを何とか切り替えた。

通りに出てみる人影がまばらで、適度に空白があった。横田はまだ出てこないようだ。私は先に通りで待っていた立会人の一人から、自分の消音器付きの自動拳銃を受け取った。マガジンを抜いて薬きょうの数を確認した。六発入っている。念のため拳銃のスライドを引いて薬室が空であることを確かめた。事前の約束と違って弾数が多いようなことがあるたら原則にならぬ。マガジンを銃に装填してスライドを操作して初弾を薬室に送り込んでから安全装置をかけた。銃を右手で持って腕の緊張を解いて下にぶら下げた姿

勢で待った。いろいろな人が行き交うが私の手にしているものが何なのかを気にする人はやはりいなかった

「おじさん。遊ぼうよ」

その声に横を向くとやたらと濃い化粧というのか仮装というのかよくわからぬ顔で髪を茶色に染めた高校生ぐらいかと思われ少女が立っていた。それともませた中学生か。

「ごめんね。今仕事なんだ。また今度見かけたら声をかけてくれ」  
「ふうん」

少女が背を向けるのを見てから通りに目を戻すと、横田がいつの間にか出現していることに気がついた。目測で二十メートルほど離れた位置に立っている。いくら雑踏や騒音があるといってもなぜ気がつかなかったのだろうか、不思議に思えるほどどこから不意に現れたのだ。

（淫乱同士の首締めながら）

また始まった。どうしてこのような重大な場面になって脱線が始まるのか。この仕事が終わったら一度医者に相談した方がいいかも知れない。それにオリジナルは何だったのか思い出せないのが気になった。首を絞めるともつと気持ちよくなる。これは何のことだ。私は自分がちょうどたまたまできた薄暗がりの中に立っていることに気がついた。これでは物陰にひそんでいると誤解されかねない。

あとになつてから条件に不公平があつたなどと言われたくないので、二歩前に出て明るみの中に移動した。この距離は私の能力の限界に近い。

これは横田の情けか、それともフェアプレイ精神か。横田は二十メートルが五十メートルになつても的をはずさないと聞いていたので、いっすぐそばまで行つて直射しようかと思つた。しかし歩いていく間にさつさと撃たれてしまふだろう。ここでやるしかない。具合よくその次の瞬間、通りの人影がとぎれた。始めようかというように、横田が目で合図した。私は同意する意味でうなづいた。横田の無造作だつたためか私はいつどうやって横田が拳銃を抜いたのかからなかつた。横田と私の間を酌量した男が通り過ぎなかつたらその瞬間に決着はついていたかも知れない。抜き撃ちの勝負だつたらそこそこで終わつていたはずだ。相手は本職で一流の間なのだ。私は偶然そのようにならざらぬ人多い場所を選んだことで横田の手をある程度封じられないかと考えていた。

しかし大変なプレッシャーだ。完全にのまれてしまつてゐる。横田は悠然と上着のポケットから取り出した消音器を拳銃に取り付けなように思えるが、この間合いで動作に移つたら即座に撃たれるだ

ろう。まだだ。  
横田の準備ができてから、私は左脚を一步前に踏み出し、右足を横にひらいて、拳銃を持った右腕を水平にあげて銃把を握った。右手を左腕の肘を曲げながら左手で支えて、横田に対して半身の姿勢をとった。このようになる。姿勢をとると人間の体の急所の多くが相手から隠れることになる。そもそも私の場合その姿勢でないと、この構えは本来はライフルや散弾銃の姿勢なのだ。我流だがそれ以外に確実なフォームがないのだ。  
横田が私に対して正対したまま拳銃を持った右手をこちらに向け、私の横田がやっていると、昔のハリウッドの三流の西部劇映画の質の悪いパロディではないかと思った。違いと言えば空砲か実弾かの違いだけじゃないのか。  
銃口を自分の指の延長だと思って相手を指さす感じでねらって引き金を絞り込めと教わっていたので、横田の体の中心をねらって引き金を引いた。消音器で減音された発砲の音は周囲の騒音にほとんどかき消されていた。  
横田の腰の左側面をかすったかと思われたが、ほぼ同時に、左胸に連続して衝撃を受けた。やられたかと思っただが、不思議と痛みを感じ

ることもなく何事もなかったかの様子なので、そのまま次弾を放つた。横田はほんの少しだけ首をかしげた。よけられてしまった。きつとそれがプロの「見切る」ということなのだろう。

相手に余裕を与えないように、それでいて自分の撃った弾が無駄撃ちにならないように、慎重に構えてねらいを付けようとしたとき、急に後ろから誰かにぶつかられた。引き金に力が加わり地面に向かつて暴発してしまった。

「うわっ」

「ごめんなさい」

若い三人の女性が歩きながら歓談をしている内に話に取り残された一人が私に気がつかずにぶつかってしまったらしい。

「いえ。私がぼんやりしていました」

私とその女性に向かって頭を軽く下げたその瞬間に、私の後頭部のほんのすぐ後ろを相次いで弾がかすめた。

横田を見ると、あきれたやっだとも言いいたいような表情で私を見ていた。女性のグループは射線をふさぐように歩いていった。横田と私は互いに向き合ったまま拳銃を持った手をだらしと下げながら次のタイミングを待っていた。彼女たちは私たちの手にしているものがなんなのか気がつかなくはなかったらしい。それとも大の大人が子供じみたまねをして恥ずかしくはないのかとも考えたのだろうか。

横田はいつも二発連続して撃つ。それと同時に常に最後の一発は必ず残すという。今残っているのは二発だ。この矛盾した条件をどう整理するのか。私が提案した六発という偶数の数字が、こんなところでは横田に混乱を生じさせてくれないだろうかと考えた。

次はどこをねらってくるか、一撃必殺おそろく頭だろう。私はそう予測をして覚悟を決めながら、あらためて横田の体の中心をねらった。女性たちのグループが一瞬笑い声とともに隙間を作った。横田も私もその瞬間を見逃さなかった。私の撃った弾が横田の右手に当たった瞬間、私の眼鏡が真ん中からまっふたつに折れて吹き飛ばされた。横田の手から拳銃が滑り落ちて地面に当たって暴発した。

横田の拳銃はもう弾が残っていない。私はまだ二発残している。この時点ですでに勝負はついていないはずなのだが、もっとはつきりした形にしないと双方の人間が納得しないだろう。

どうすべきか。どのようにすればこの勝負の勝ち負けがはつきりするようになるのか、少し考えた。横田は、どうにでもしろという様子で腕を下げて私に正対して立っていた。私は銃を構えなおしてから、絶対にしてはいけなと言われていた行為をしてみました。左目をつぶって右目だけでねらいを付けたのだ。そうしないと眼鏡なしでは視野が二重になってしまっかねらいつけようがないのだ。先輩から教わっていた人間の急所のいくつかの中のひとつ。私

の撃った弾は横田の右肩に当たった。横田は身じろぎもしないでその場所に立ったままだ。

私は最後の弾を残したまま銃の安全装置をかけて、歩み寄ってきた立会人の一人に渡した。彼は訳がわからないと言いたそうな顔をしながら拳銃を受け取った。

「終わりました」

「終わったって、まだ横田は立っているじゃないの」

「でも終わったんです」

足下近くに落ちていた壊れた眼鏡を拾いながら、これは高かったのになぜ必要経費で落とせないのかなとふと考えた。立会人と一緒にゆっくりと横田のいる場所に歩いていった。双方の立会人に囲まれる形で横田と向き合った。

「お前、まさか防弾チョッキなんか着ていないよな」横田が言った。

「そんなことはしませんよ。変ですね。最初の二発で私は死んでいくはずなのに」

私は自分の上着に小さな穴がほんのわずかの間隔を置いて開いているのを確かめた。この穴のことを妻にどう説明すればいいのだろう。内ポケットを調べてみて初めてなぜ致命傷にならないのかかわかった。私は普段の仕事をしているときのシステムの手帳と名刺入れをいれたままだったのだ。

「申し訳ありません。こんなものがありました」  
会社の同僚から『電話帳』とあだ名されている分厚い革の手帳と薄い金属製の名刺入れでけし粒ほどのふたつの小さい弾頭が止まつていたのだ。二十口径の小さい弾では、そういうこともあるのだとは聞いていたが、まさか自分がそんなことをしてしまうとは思っていなかった。本当にわざとしたことではないのだ。  
「しかたがないな。わざとやったことじゃないから文句は付けられないが」  
横田は自分の側の立会人にそのことについてクレームを付けることはないと伝えた。  
「それにしてはやることもせくないか。まだ二発も残っているのにとどめをささないで中途半端なことをやりやがって。何なんだよこれは」  
私は横田の右手を確かめてから返事をした。  
「右手を見てください。人差し指の先が吹き飛んでいる。それに腕を持ち上げてみてください」  
横田は右腕を持ち上げようとしたが上がらなかった。  
「動かないでしょう。最後の一発で腕の神経がやられているんだ。手当をすればじきに動くようにはなるけれど拳銃稼業のような微妙な仕事はもう無理です。だからあなたは私に殺されたも同然なんだ。」

私の勝ちということじゃありませんか」  
直すわけにもいかない私の言い分もそれなりに意味が通っている等々  
「俺はこの稼業以外に能がないんだ。役に立たないまままでこのまま  
生き恥をさらせつていうのか。薄情な話だぜ」  
横田が吐き捨てるように言った。  
横田の左手に落ちていたままの拳銃を拾い上げて  
「私なりに考えたんです。余計な人殺しをしないで決着をつけるに  
はとっさにこういう形しか思い浮かばなかった。気に入らないかも  
知れませんが誰も死なないで済むならその方がいいんじゃないです  
か。会社どうしの件についてはこれで終わりということはいけません  
んか」  
私の言葉に横田が気色ばんだ。  
「倉田、お前少しばかりいい気になっていないか。会社の仕事だから  
お前のくだらないルールにつき合っていないだけぞ。俺がその気  
になつたら左手を使つてもお前なんかいたでもはじけるんだぞ」  
横田のその言葉に私は急激な現実感の復帰に襲われた。初めて今  
まで命のやりとりをしていたのだという恐怖を感じて全身がしびれ

た。きっと私の顔からは血の気が失せていたに違いない。しかし横田の険しい表情が一転してゆるんだ。

「安心しろ。会社の仕事を私怨にすり替えるようなことはしないよ。そんなまねをしたら俺のキャリアに傷が付く」

私はほっとした。横田のプライドのおかげで私は死なないですむ。「それにしてもなあ」横田がため息をついた。「一番最後が、お前みたいな素人にやられて手も足も出ないで負けたっていうのは、本当に情けない話だ。そう思わないか」

「ついていただけですよ。最初の二発が手帳で止まったのも、次の二発がお辞儀をした頭の後ろをかすめていったのも、眉間をねらった弾が眼鏡に当たってどこかに跳んでいったのも、全部偶然だ。しかし運も実力のうちっていいませんか」

「あきれたやつだな。素人は何をするかわからないから怖いよ」

「それと横田さんが上手すぎたってこともある。腕が正確すぎたから私は死ななかつた。もっと下手だったら私のほうが負けていたと思えます」

「そんなものかな。なあ氷室」

横田が初めて私の昔の名前を呼んだ。

「はい」

「おまえに負けたからいうんじゃないけれど、こんな拳銃稼業で命

のやりとりをするなんてもう時代遅れなのかもしれないな」

「そうかもしれないですね」

「おまえは正業があるからきれいに足を洗えるが、俺は引退するしかないみたいだ。おまえがうらやましいよ」

「表の会社は会社で、毎日弾の飛ばない戦争をやっているようなものです」

「そうなんだろうな。俺には生涯わからないだろうが。じゃ、達者でな」

「はい。横田さんもお元気で」

「あばよ」

「そろそろその通りのピケットラインが限界に近いということなので立会人と一緒にその場を離れた。私の立っていた場所に散らばっていた空の葉きょうを回収したが、四発分しかなくてどうしても残りのひとつが見つからなかった。自動車のタイヤの溝にでも挟まっていたどこかにいつか見つかったのだろう。後始末はきちんとしておくと教わっていたのだけれども、どうでもよくなってしまう。葉きょうの処分を立会人に頼んでも、社長によるしく伝えてくれと一言そえてから、私は家路についた。

夕食を食べていなかったため、急に空腹感が強くなって、食事をしてから帰ろうかと思っただが、いつも行く食堂はすでに閉まっていた。

た。し。か。た。な。く。近。所。の。コ。ン。ビ。ニ。エ。ン。ス。ト。ア。で。弁。当。を。買。っ。て。家。に。帰。  
っ。た。し。か。た。な。く。近。所。の。コ。ン。ビ。ニ。エ。ン。ス。ト。ア。で。弁。当。を。買。っ。て。家。に。帰。  
が。な。い。か。ら。食。べ。た。一。緒。に。買。っ。て。お。け。ば。よ。か。っ。た。  
組。織。対。組。織。の。面。子。を。か。け。て。の。大。勝。負。の。結。末。が、コ。ン。ビ。ニ。の。弁。当。と  
缶。ビ。ー。ル。で。の。祝。杯。と。い。う。の。は、少。し。馬。鹿。げ。て。い。る。な。と。思。っ。た。